



薦王
外伝 瑠璃とお菓子 1

くる ひなた
Kinata Kuru



レジーナ文庫

登場人物紹介

▲ルドヴィーク
(18歳)

クロヴィスの弟で、
現在の皇帝陛下。

▲ヴィオラント
(28歳)

クロヴィスの兄で、
先の皇帝陛下。

▲スミレ
(16歳)
ヴィオラントの妻。
実は異世界出身。

▲アルヴィース

クロヴィスの祖父。
公爵位を孫に譲り
現在隠居の身。

▲ロイズ
(5歳)

クロヴィスの屋敷の養い子。
クロヴィスをとても慕っている。

▲ハニマリア

クロヴィスの祖母。
久しく世に姿を見せて
いなかったが……

▲クロヴィス
(24歳)

グラディアトリアの宰相閣下。
冷徹で厳しい人物と恐れられている。
別名「鬼の宰相」。

▲ルリ
(18歳)

没落貴族の娘だが、現在は
グラディアトリアの母后陛下に
仕える侍女。お菓子作りが得意。

▼ちびセバス

自ら意思を持ち、動くことのできる鳩。
宰相閣下の補佐官を自任する。

目次

6	5	4	3	2	1
瑠璃とケーキ 後編	瑠璃とケーキ 前編	瑠璃とプレゼント	瑠璃とスパイス	瑠璃と紅茶	瑠璃と栗 <small>くり</small>
164	122	98	70	42	8
7					

おまけ 瑞穂と吉報

鳶つ
王おう

外傳

瑠璃るり
とお菓子1

1 瑠璃と栗

若き皇帝の統治のもと、人々が平和を謳歌^{おうか}している大国グラディアトリア。

その王城の庭園の一角。大きな木の下に小柄な人影がうずくまつっていた。

ふわふわくるくるの柔らかそうな髪は、この世界では珍しい漆黒^{しづく}で、瞳も稀少な紫色。長い睫毛に大きな瞳、ちょこんと小さい鼻と口が、シンメトリーの完璧なバランスで配置された文句なしの美少女である。

ふわりとした愛らしいドレスの裾を地面に擦りかけながら、彼女は何かに夢中になつてゐるようだつた。

そんな少女の側を偶然通りかかつた者がいた。

「——あら？」

その者は少女の姿を見つけて、栗色の髪を揺らして首を傾げた。彼女は、名をルリといふ。

ルリは、グラディアトリアの國母^{こくも}と慕われる母后^{ぼこう}エリザベス・フィア・グラディアトリアの侍女として、王宮で働いている。

この日彼女は、侍女頭から使いを頼まれて一人で街に下りていた。

街の小さな雑貨屋に腕がいいと評判の細工師がいて、そこに侍女頭が依頼した母后陛下の髪飾りを受け取りに行つたのだ。

ついでに他の店を自由に見てきてもかまわないと言つて、彼女はルリを送り出した。普段年頃の娘らしく買い物に繰り出すこともなく、休日も一人王城の図書館で過ごしているルリを気づかってくれたのかもしれない。

そんな侍女頭のおせっかいに苦笑しつつ、せつかだからと少しだけ街を散策してきたルリは、城門をくぐるとそのまま母后陛下の居室を目指した。本来は王城の正面から入ることになっているのだが、実は裏の庭を通つた方が近道なのだ。

そうして、緑の芝生を踏みしめて歩いている時に、ルリは少女がうずくまつているのに出くわした。

「——スミレ様？」

ルリが仕える母后陛下には、腹を痛めて産んだ三人の御子がいる。

二年前に十六歳という若さで即位した現皇帝陛下が、末子であるルドヴィーグ・ファア・グラディアトリア。

その上には、隣国コンラートの王妃となつた一の姫アマリアスと、騎士団副長として名を馳せる二の姫ミリアニスがいる。

母后陛下はさらに、夫である先々代皇帝フリードリヒの側室——リュネブルク公爵家の一人娘マジエンタが産んだ皇子二人をも、我が子と変わらぬ深い愛情を持って育てた。その一人が、先の皇帝、銀髪と紫の瞳の絶世の美貌を誇るヴィオラント・オル・レイスウェイク。

歴史に残る大改革を成し遂げ、若くして腹違いの弟に位を譲つた彼は、現在母方の祖母の旧姓を名乗り、グラディアトリア唯一の大公爵の位をあずかる身である。

そしてもう一人が、グラディアトリアの宰相となり、リュネブルク公爵家を祖父より受け継いだクロヴィス・オル・リュネブルク。

マジエンタは彼を産み落とすと同時に亡くなつた。

クロヴィスは一見穏やかで優しげな紳士であるがその瞳は冷たく厳しい、と恐れられている人物であり、時折美女と浮き名を流しながらも、特定の恋人を持たないことも多かった。

しかしそんな彼らがある時を境に、頻繁に母后陛下の私室に集まるようになり、今まで以上に親しく語らうようになつていた。
そのきっかけとなつたのが、少し前にヴィオラントに嫁いだシユタイアーレ公爵家の令嬢である。

そして、今ルリの目の前の前地面にうずくまつている少女こそが、その貴重な存在であった。さらには彼女は、地球という異世界から飛ばされてきたという大変珍しい経験の持ち主であり、そういう意味でも貴重な人物なのだが、それはまた別の話である。
「スマレ様、いかがなさいましたか？」

ルリが気遣わしげに声をかけると、スマレ・ルト・レイスウェイクは、足下に向かっていた視線を彼女に向かえた。

「——つ……」

とたんにとびきり可愛らしい笑顔が弾け、鈴を転がすような声がルリの名を紡いだ。

ルリは思わず息を呑む。

侍女頭ならまだしも、ルリのような目立たない侍女の名など、大公爵夫人が憶えてくれているとは思わなかつたからだ。

そんな思いがそのまま顔に出ていたのか、少女はクスクスと笑つて言った。

「何度も母后様のところにお邪魔してゐるし、美味しいお菓子を用意してくれる人の名前くらい知つてるよ。ルリさんは、お菓子作りが得意なんでしょう？」この前ごちそうになつたクルミ入りのやつ、すつごく美味しかつた！」

「あつ、ありがとう存じます！」

元々お菓子作りが得意なのは母だつた。

母の作ったそれを母后陛下が喜んで食べてくださるので、ルリも母から習つたのだ。

母后陛下は「城の料理長にも負けないわ」としきりに褒め、大切な客人が来る時は必ずルリのお菓子でもなした。

そのルリのお菓子を王城を訪れる度に口にするスミレが、母后陛下にとつても、また他のグラディアトリアの皇族達にとつても特別な存在であることは、もう誰もが知るところだつた。

ルリの人生は、一度転落しかけた。

父はかつて、大国グラディアトリアでも大きな力を持つ侯爵であつた。

広大な領地を有し、多くの領民を抱え、公爵家にも引けをとらぬ榮華を誇つていた。

余りある財力にものを言わせ、ルリの父の王宮での発言権はより強まつた。

しかし、やがて侯爵家は榮華に溺れ、領民に対して圧政を敷き始める。

当時、同じように権力を笠に着た貴族達が私利私欲にまかせて内政を食い荒らしており、大国グラディアトリアの国力は衰退しかけていた。

そんな危機的状況を打開したのが、元々代皇帝フリードリヒの崩御にともない即位した、彼の第一子ヴィオラントだ。

ヴィオラントは、成人を迎えたばかりの傀儡皇帝となめてかかつて古狸どもを蹴散らし、全身を血塗れにして王宮の腐敗を一掃すべく突き進んだ。

父を主とする侯爵家の者達は領民に重すぎる税を課し、男達を私用の労働に駆り出

し、女や子供を飢えさせた。その中には、ルリの父も含まれていた。

父を主とする侯爵家の者達は領民に重すぎる税を課し、男達を私用の労働に駆り出

さらには陳情に訪れる領民の代表者を処刑するなど、数々の私刑も繰り返していたらしい。

侯爵家が重ねた数々の重い罪を、ルリの父は命をもつて償うこととなつた。

当主を処刑された侯爵家は財産をすべて没収され、ある者は路頭に迷い、ある者は復讐と称して皇帝に刃を向け、返り討ちにされた。

その時、ルリはまだ六歳になつたばかり。

ルリの母は正妻ではなく、いわゆる妾めかけという立場であつた。

庶子が正妻の牛耳ぎゅうじの屋敷に住まわせてもらえるわけもなく、ルリは母と二人、王城の近くに屋敷を与えられて暮らしていた。

しかし、父名義のその屋敷も当然没収の対象となつた。

住む場所を無くし父からの生活費も途絶え、母の実家からも罪人となるような男と関係していたと見放され、ルリと母も路頭に迷うかと思われた。

しかし、そんな母子おやこに救いの手を差し伸べたのが母后陛下ぼうこうじしやくだつた。

ルリの母はかつて母后陛下の侍女を務めていた。その時に父に見初められ、ルリを産んだのだ。

二人の窮状きゆうじょうを聞きつけた母后陛下は、再びルリの母を自分の侍女に召し上げ、王城内

に部屋を与えてくれた。

さらには、ルリに侍女見習いをさせながら、一通りの教育まで受けさせてくれたのだ。それから七年後、母が病を得てルリの成人を待たずに亡くなると、母后陛下はルリの後見を買って出してくれた。

慈愛溢れる母后陛下に対するルリの感謝の思いは言葉では言い尽くせない。

成人後は好きな道に進んでいいと言つてくれた彼女に対し、ルリは一生侍女としてお側に置いてくださいと請うたのだった。

「こんな所で、いかがなさいましたか？ 大公閣下だいこうかくとご一緒に緒ではないのですか？」

ルリが近づくと、スミレはびよこんと立ち上がつた。

ルリも背が大きい方ではないが、彼女はもつと小さくて、こちらをうかがう上目遣いは女から見てもドキリとするほど可愛らしい。

年はルリより二つ下の十六歳。夫であるレイスウェイク大公爵とは歳が十二も離れていて、かの方の溺愛できあいぶりはそれはすさまじいと聞く。よくこんな所に一人でいることをお許しなつたな、と思いながらそれを問うと、スマレは「あのね」と上を指差した。

「そこの二階、クロちゃんの執務室なの。ヴィーは今そこで難しい話をしてて、退屈だから出てきちゃった」

「はあ……」

『クロちゃん』とは、泣く子も黙る宰相閣下クロヴィス・オル・リュネブルク公爵。

『ヴィー』とは、彼女の夫であるヴィオラント・オル・レイスウェイク大公爵。

スマレにだけ呼ぶことが許された愛称を頭の中で正式な名前に変換しつつ、ルリは上を見上げた。

『部屋から見える所にいるならいいって言われたから』

『そうでございましたか』

『そしたら、ここに栗が落ちたの』

『え?』

『そう言う彼女の手元を覗き込むと、なるほどその小さな手には大振りの木の実が握られている。』

『この国では、栗は食べないんでしょう?』

『そうでございますね。それは大抵、庭園に住まう動物や家畜のエサになりますね』

『ところがどっこい、これってば蒸したり焼いたりしたらおいしいんだよ? 私の故郷

では、秋の味覚として重宝されてたの』

『まあ……』

『それは初耳だった。』

とげとげのいがに包まれたその木の実は、確かにドングリなどと比べて大振りで食べ応えもありそしだが、人間の食用とはされていなかつたのだ。

スマレはルリの見守る中、熟れて枝から落ちたいがを器用に木の棒でこじ開けて、中に二、三個仲良く並んでいた実を取り出すと、掌に載せてましまじと眺めている。

『スマレ様、これは皮を剥いてから蒸したり焼いたりすればよろしいのですか?』

『うーん、皮はとっても硬いからね。怪我しちゃうといけないから、まずは皮付きのまま茹でたらいいと思うよ。そうやって熱を入れてから、皮ごとナイフで半分に切つて、中身をスプーンでくり抜くといい』

ルリはなるほどと頷きながら、少女の言葉に耳を傾けた。

大公爵夫人という立場ながら、スマレが料理に造詣が深いというのは、王宮で、特に母后陛下に仕える者の間では有名な話だ。

何でも、レイスウェイク家に嫁ぐ以前から調理場に立つことが多く、大公爵夫人となつてからはお菓子作りにも凝り始めたのだという。

その理由が、甘いものが苦手でそういう類いのものを一切口にしなかつた夫に、お菓子を食べる楽しさを教えてやりたかったからという話なのだから微笑ましい。

スミレは嫁いで以来、母后陛下ほこうへいかを訪ねる度に手作りのお菓子を差し入れ、それは毎回彼女に仕える侍女達にも振る舞われた。

ルリも何度もお相伴しつばんにあずかつたが、その腕前が本物であることは疑うべくもない。

先帝ヴィオラントも、彼女が作った菓子だけは躊躇なく口に入れるのだという。

そんな、様々な面において貴重で愛すべき大公爵夫人は、小さな掌てのひらの上で木の実をころごろと転がしていたが、突然自分のドレスの襟元えりもとをちゃんと引つ張ると、慎ましい膨らみの間に実をぽいぽいと放り込み始めた。

「ス、スミレ様！ 何をなさいますっ！」

「持つて帰つて蒸そうかと思つて。でも、この服ポケットないんだもん。手に持てる量なんて限られてるし……」

「いけませんっ！ そんな所に入れてはなりませんっ！」

驚いたルリは礼儀も忘れ、彼女の小さな手を掴んで止める、慌てて懐ふしづかから取り出したハンカチの四方を合わせて結びつけ、即席の手提袋を作った。

その中に、拾い上げた木の実を詰めてやると、スミレはルリを見上げてにこりと笑う。

「ルリさん、ありがとう」

その笑顔を向けられると、つい何だつてしてやりたくなる。

先帝陛下がこの小さな奥方を、目に入れても痛くないほど溺愛できあいしているのも領けた。

ルリはしばしの間、スミレの栗拾いに付き合つた。

そうして、ひとしきり拾い集めて袋がいっぱいになつた頃、いがを棒で突いていたスマレがひょいと上を見上げた。

彼女は宰相さいじょうの執務室だという二階の窓を見つめ、少しの間何やら考え込んでいたが、突然実が詰まつたままのいがを一つ掴み上げた。

「スミレ様っ！」

それを見たルリは、いがが彼女の柔らかな肌を傷付けやしないかと焦つた。

しかし、ふんわりと丸めた掌で器用にいがを包み込んだスミレは、「さすがに、いがはまずいか」とぼつりとつぶやくと、その中から実を一つだけ摘み上げた。

そして、大きく腕を振りかぶったかと思つたら、「えいやっ」と、それを件の窓めがけて放り投げたのだ。

「――っ……!?」

「おー、入った入った」

狙い通りの場所に入れられたらしいスミレは、絶句するルリを尻目に得意げに胸を張つた。

「——スミレか？」

それに対し、二階の窓から降ってきたのは、穏やかな低い美声だった。

思わず振り仰いだルリの目に、陽の光に透ける絹糸のような白銀の髪を携えた美貌が飛び込んでくる。

記憶の奥にこびりついた畏怖^{いふ}に、ルリは息を呑み身を強張らせた。

先帝ヴィオラント——ルリの父の首を刎^はねた張本人だ。

ルリ自身は、彼に対する恨みも憎しみも抱いてはいないが、ルリの母は母后陛下^{ほこうへいか}に深い恩義を感じつつも、死ぬまでずっとヴィオラントを怨んでいたようと思つ。

母は、確かに父を愛していただのだから。

色んな意味で畏れるべき男を前にし、慌ててルリは頭を垂れる。

対して、いかにも無邪気な様子で彼に手を振ったスミレは、楽しそうな声で尋ねた。

「ヴィー。今、クロちゃんにピットした？」

「したぞ。煮詰まっていた頭が真っ白になつてゐる」

美しすぎる無表情と名高きその顔^{かんぱせ}も、愛する奥方の前ではかすかに綻ぶ^{ほころぶ}。

それをちらりと盗み見たルリは、無意識にほっと息を吐き出した。

おかしそうに答えたヴィオラントが室内を振り返った直後、がばつと彼の傍らから顔を出したのは、その部屋の主たる宰相閣下^{ねしょくかくか}だつた。

どうやら先ほどスミレが投げ込んだ栗は、見事に彼に命中したらしい。

いつもは冷静な宰相閣下^{まなざり}が、眦^{まなざ}をつり上げて階下の少女を怒鳴りつけてきた。

「こらつ、この悪戯娘！ 窓にものを投げ込むんじゃありませんっ！」

自分が叱られたわけでもないのに、ルリは思わずビクリと竦み上がる。

しかし、当の本人はというと、怒りのオーラを噴き出す宰相閣下に怯むことなく、に

こりと笑顔を返した。

「ちがうよー、私が投げたんじゃないよー。可愛い可愛いリスさんが、そろそろお茶の時間だよって、仕事馬鹿な宰相様に教えてくれたんだよー」

「その堂々と嘘を吐き出す可愛い唇を摘ん^{つま}んであげますから、さつさと上がつてきなさいどこか諦めたようなため息をつきながら眉間を揉んだクロヴィスは、ふと視線をスミレの傍らにいたルリに向か^{むか}つた。

「そこのあなた」

「あつ、はつ、はいつ！」
突然声をかけられたルリは、慌てて背筋を伸ばして返事をする。
彼女の反応にこっそりと苦笑したクロヴァイスは、横にいる兄ヴィオラントに問うよう
な視線を送った。

ヴィオラントがそれに頷いて返すと、彼は再び窓の下のルリに向き直る。
「あなたの仕事を増やしてしまって申しわけないですが、そこにいる私の義姉をここまで
連れてきてはくれませんか」

「はい、私でよろしければ」
「すみませんね、よろしくお願ひしますよ——ルリ」

「——つ……！」

ルリは再び息を呑む。
まさか、宰相閣下までただの侍女の名前を知っているとは思わなかつた。

その傍らの紫の瞳も、何もかも知つてゐるかのように、静かにルリを見据えている。
おそらく彼らは、ルリの生い立ちを把握しているのだろう。

肅清された貴族の庶子であるルリが、今後不穏の種となるかどうか見ついているに違
ない。ルリ自身は、父や一族の恨みを晴らそうなどとは思つていながら、彼らから見れ



ば自分は皇族に害をなす動機を持つ人間なのだろう。

そう思うと、ルリの心はどんどん冷たく凍こごっていくようだつた。

——しかし。

「ルリさん、一緒に行つてくれるの？」

その言葉と同時にルリの手に触れたのは、柔らかな温もり。

あどけなくさえ見える大公爵夫人の小さな手が、ルリの手にそつと絡まつてきた。

その時ルリははつとして、再び階上を振り仰ぐ。

自分とスマレに降り注ぐ二対の瞳は、ただただ温かく、その眼差しには疑惑などかけらも混じつていないように見えた。

スマレのような小柄な少女一人、ルリでも害するのにはたやすい。

もしもクロヴィスやヴィオラントがルリに信用がおけないと思つてゐるならば、大切な大切な少女を任せたりしないだろう。

しかしそんな彼女を、ルリは預けられた。——預けてもらえた。

それは、彼らがルリを少しも疑つていないという証拠である。

父の犯した罪から離れられなかつたのは、ルリ自身だつた。

自ら疑惑という名の蔓つるに絡めとられて、人の目を恐れて疑心暗鬼になつてゐたのだ。

それがどれほど愚かで無益なことか、この時ようやく理解できたような気がした。胸が、じんと温かくなつた。

「一緒に参りましようか、スマレ様」

「うん」

ルリは、大切な少女の手を優しく握り返し、そつと引いて歩き始めた。

「『ルリ』って、素敵な名前ね」

「まあ、ありがとうございます」

ルリという名は、母がつけてくれた名だ。

短く、特に意味もない言葉だが、母后陛下が「鈴の音のようで可愛らしいわ」と言ってくれるので、とても氣に入つてゐる。

「ルリってね、私の故郷では青色をした鉱物の名前で、宝物にもされてるんだよ」

「まあ、そうなのですか？」

「瑠璃」。

それはスミレの祖国の文字らしく、ルリが今まで見たことのない幾何学的な紋様だつた。ルリには全く読むことができなかつたが、スミレはあまり気にする様子もなく話を続ける。

「金・銀・瑠璃に瑪瑙に……あと、何だっけ？　えっと、とにかく七宝の一つで、とつても綺麗な青色をしているの。ちょうど、ルリさんの瞳みたいな」

「まあ……」

金や銀はグラディアトリアでも高級品として重宝されている。それと並ぶ宝物に自分の名前をたとえられたルリは、何だか照れくさくなつた。

それに、愛する母譲りの瞳を褒められることもとても嬉しく、誇らしかつた。

愛らしい大公爵夫人の手を引いて城内を歩けば、当然ながら多くの視線が集まつてきた。けれどそのどれもが好意的で、彼女がどれほどこの国の人々に愛されているのかがよく分かる。

いつもはツンと澄ました貴族の令嬢まで、「いいわね、その手を譲つてほしいわ」とルリを羨ましがるほどだ。

スミレはそんな人々に対して、とにかくにこにこと笑顔を返していたが、決してルリ

の手を離すことはなかつた。

その様子から察するに、彼女は大公爵夫人として愛想を振りまいていても、実際はそれほど社交的なことが得意でなく、ルリの手に縋つて早くその場を通り過ぎたいと望んでいるのではないか。

そう思うと、ルリの庇護欲はむくむくと膨れ上がり、その後は巧みに彼女を庇いながら目的地である宰相執務室を目指した。

そうして辿り着いたのは、見上げるほどに大きな扉。

ルリが仕える母后陛下の私室のそれと似ているが、宰相執務室のものはさらに重厚な雰囲気を漂わせており、ノックを躊躇するほどだつた。

それでも、片手に握つた柔らかな掌に奮い立たされ、ルリは控えめにそれを叩いた。「おかげり」

ノックに応える声よりも早く、内側から扉が開かれた。

二人を出迎えたのは、この部屋の主ではなく、その兄である先帝ヴィオラントだった。思いがけず正面から彼と対峙してしまつたルリは、普段こうやって間近に見ることなどない至高の美貌にびっくりと竦み上がる。

繫いだ手からそれを感じたのか、スミレはルリを見上げて小さく苦笑を漏らすと、今

度は逆に彼女の手を引つ張つて部屋の中へと連れ込んだ。

「ヴィー、ただいま」

「栗だよ」

スミレは片手にぶらぶら提げてきた栗をヴィオラントに見せつつ、その入れ物はルリが工面してくれたのだと告げる。

すると、目元を優しく緩めて妻の話を聞いていた先帝陛下の視線が、すっとルリを捉えた。

思わず全身を緊張に強張らせた侍女に、彼は苦笑するように目を細めると、大切な少女を抱き寄せつつ言つた。

「妻が世話になつたな。礼を言う」

「——いっ、いえっ！」

「そなたも、義母^{ははうえ}上の使いの途中だったのではないか？ 手間を取らせてすまなかつた」「あ……いえ、急ぎの用ではありませんでしたし、帰りの時間も定められてはおりませんので大丈夫です。それに……」

相変わらずルリの緊張が解けることはなかつた。

それでも、ずっと遠く恐ろしいばかりの存在だった先帝陛下が、自分が手を引いてきた少女を大事そうに腕に抱き、愛おしくて堪らないといった様子で頬を寄せる様を見ていると、何だか心の奥が柔らかく解れていくようを感じた。

ルリの唇から、自然と温かな想いがこぼれ出す。

「スミレ様とご一緒にきて嬉しうございました。思いがけずお会いできて、楽しい時

間を過ごさせていただきました」

媚でも詔いでもない。本心からにじみ出た言葉というのは、相手の心にまっすぐに届く。ルリの言葉を聞いたスミレは、ふつくらとした頬を薔薇色に染め、溢れんばかりの笑顔を返してくれた。

その頬に愛おしげに口付けしたヴィオラントは、美しき無表情をわずかに綻ばせてルリを見た。

「——はっ、はいっ！ 喜んでっ！」

そんなやりとりを微笑ましく見守っていたのは、この部屋の主である宰相クロヴィスだ。

彼がもたれかかっている宰相執務室の大きな机の上には所狭しと書類が広げられ、そのままのすぐ脇に置かれた鉢からは、観葉植物が長い蔓を机の縁に添うように這わせている。その葉の鮮やかな緑に誘われるよう視線を向けると、クロヴィスと一瞬目が合い、慌ててルリは頭を垂れた。

対して、いつの間にかクロヴィスをじっと見つめていたスミレは、栗を両手で掬つて袋から取り出すと、ヴィオラントの腕の中から抜け出して、執務机の上にごろごろごろんと転がした。

「こらつ。おもちやを仕事机の上に散らかさないでくださいよ」

「おもちやとは何だね、クロヴィス君。これはれつきとした食料だよ」

「そうですね。^{あねうえ}義姉^{上様}のような小動物には、いいエサになるかもしれませんね」

「いいえ、クロちゃんみたいな大型猛獸のエサにもなるんですよ」

「……」

ルリは信じられない思いだった。

かの宰相閣下が、年下の少女に言い負かされてしまったのだ。

ふと見れば、そんな二人のやりとりを、先帝陛下が実に面白そうに眺めている。

実のところ、ルリは暇^{ひま}乞いをするタイミングを逃して少しばかり途方に暮れていたの

だが、高貴な方々は誰も彼女に出ていけとは言わないので、このまま空氣に徹することにした。

「あのね、今まで誰も食べなかつたからって、食べられないものだと決めつけるのはつまらないよ。冒険心のない弟を持つて、おねえちやまはひじょーに残念だ」

「木の実一つで随分な言われようですが……それはやはり家畜のエサですよ」

「かたいっ！ んもし、クロちゃんつてば、ホント頭かたいっ！ そんなだから、いつも難しい顔して書類と睨めっこしなきやなんないのよ。柔軟な考えができれば、ぱあつと名案が閃くこともあると思うんだよ」

「なるほど、一理あるな」

「兄上つ!?」

うむと頷いて先帝陛下が口を挟むと、冷徹さで知られる宰相閣下が情けない声を上げた。

そんな皇族達のやりとりに、ルリは恐れ多くも笑いを堪えるのに必死だった。

「『硬い実だから食べられない』、誰も食べたことないんだから食べられるはずがない」——でも、実は中身は結構柔らかくて、しかも手を加えたら甘くておいしいだなんて、食べてみなくちゃ一生分からないことだよ」

それは木の実のことを指しているようでありながら、国政の事案に頭を悩ませるクロヴィスを導くかのような言葉だった。

もちろん、彼が何に悩んでいるのか、それが国政においてどれだけ重要な問題であるかなど、スマレには知るべくもないが、頑なに一つの考え方や価値観に捉われていては、新たな考えは生まれてこないと言いたいのだ。

先帝陛下の言う通り、「確かに『理ある』と思つたのはルリだけではなかつたようだ。言われた本人であるクロヴィスも何か思いあたることがあつたのだろう。彼は綺麗に整えてあつた金髪を無造作にかき上げると、ふつとため息をついて苦笑を漏らした。

「何ごともやつてみなければ分からぬ……なるほど、その通りですね。確かに、私は少々頭が固かつたかもしません」

クロヴィスは態度を軟化させ、年下の義姉のアドバイスを受け入れる気になつたようだ。しかし――

「少々じやなくて、めつちやんくっちゃんに固いんです。かつちんこつちんです」

「スマレ、今日のところはそれくらいにしてやりなさい」

スマレはなおも容赦なく畳み掛け、ヴィオラントは呆れたようにそれを窘める。

そんな彼らのやりとりに、笑いを堪えるルリもそろそろ苦しくなつてきたが、幸いいたいけな侍女の腹筋が限界を迎える前に、皇族達の喜劇の舞台はお開きとなつた。「この事案については過去の例は参考程度にとどめ、もう一度、一から考え方直してみます」そう言いながら執務机の上の書類を束ねたクロヴィスに対し、ヴィオラントも「それがいいだらう」と頷いた。

退位してからのヴィオラントは、玉座を譲つた末弟ルドヴィーケの顔を立てるため、何より弟達の手腕を心から信頼するがゆえに、国家の中枢に関わるようなことには意見を述べないようにしている。だが、相談されればこうして話を聞き、過去の案件における自分の対応などを教えているのだ。

憑き物がとれたような笑みを浮かべる弟に安心したのか、ヴィオラントは栗の袋を持ち直したスマレを促すと、宰相執務室をあとにした。

最近では、街に立ち寄つて馬車を降り、のんびりと散策を楽しんでから帰る場合もあるらしい。

先帝陛下は扉の外まで見送つてくれる弟の肩を^{いたわ}労るよう叩き、小さな奥方の柔らかな手を、先ほどのルリのように優しく握つて歩き出した。

その背中に今までにないほどの親しみと微笑ましさを感じたルリは、振り返って手を振るスミレに深々と頭を垂れ、そしてはたとあることに気づいた。

またしても、宰相閣下の執務室を去るタイミングを逃してしまったのだ。

慌てて顔を上げたルリは、大公爵夫妻の後を追う形で部屋から出ようとしたが、それよりも一足早く、兄夫婦を見送った宰相閣下がパタリと扉を閉めてしまった。

「……」

再び、ルリの表情は極度に強張った。

泣く子も黙る宰相閣下。

美しい笑みを浮かべながら、使えない人間は容赦なく切り捨てる鬼の宰相。

そして、数々の美女と浮き名を流しても、誰にも心は与えない冷たい公爵様。

そんな噂の宰相閣下と思いがけず二人っきりになつてしまつたルリは、激しい緊張感に襲われる。

引きつる喉から何とか声を絞り出して、暇の許しを得ようとしたルリだったが、またしても相手に先を越されてしまつた。

「――お茶にしましようか」

「……は、え……？」

若い侍女が可哀想なほどがちがちに緊張しているのが分かったのか、クロヴィスは苦笑するように口元を緩めてそう言つた。

まともな返事もできないルリに呆れるでもなく、彼は接客用のソファの脇に置いたワゴンへと歩いていく。

宰相閣下自ら、お茶の用意をしようというのだ。

それに気づき、ようやく我に返つたルリは、慌てて自分もワゴンへと駆け寄つた。

「お待ちくださいっ！　お茶のご用意でしたら、わたくしがつ……！」

そう言い募るルリに、クロヴィスは柔らかく目を細めて「いいえ」と返す。そしてポツトに伸びた彼女の手をとり、スマートな所作でソファへ導いて座らせた。

〔義母上の侍女であるあなたに、スミレのお守りという余計な仕事を頼んでしまつたのは私です。その礼をさせてください〕

「クロヴィス様つ、ですが……」

「これでも、私はお茶を淹れるのがうまいと、あの手厳しい義姉上からお墨付きをいただいてるんですよ？」

〔使いの帰りの時間は定められていないと、先ほど言つていましたよね。急ぎの用ではないのですが、わたくしは……あの……あの……〕

なかつたと

「はい、あの、ですが……」

「——それとも、私のお茶に付き合うのは嫌ですか？」

鬼の宰相閣下さいじょうこうかにそう言われて、断れる人間がいるなら会つてみたいとルリは思った。

「い……いただきます……」

「よろしい」

冷たい汗が背中に流れるのを感じつつ答えたルリに、クロヴィスは満足げに頷くと、彼女の側で茶葉の箱を開いた。

そうして、思わず見^み瀬なまれるほどの手際の良さでお茶の用意をした彼は、ポットとカップに視線を落としたまま話を続けた。

「そういえば、あなたはお菓子を作るのが得意だそうですね？」

「……え？」

「義母ははうえ上うえはもちろん、スマレもしきりに褒めていました。先日はこの絶品は食べなきや損そんと言つて、わざわざ私の口に放り込みに来ましたよ。クルミの入つたマフィンでしたか。あれは確かに、とても美味かつた」

宰相閣下がお世辞を言うような方ではないことも、広く知れ渡つている。

そもそも一介いっかいの侍女に胡麻ごまをすつて得することなど何もない。だからこれは本心からの褒め言葉なのだろう。

「あつ、ありがとう存じますっ！」

嬉しくて嬉しくて、感謝の言葉をついつい大きな声で口にしてしまう。

直後、そんな自分の無作法に恥じ入つて、真っ赤な顔で俯いたルリに対しクスクス笑いながら、クロヴィスはちょうどいい濃さになつたお茶をボットからカップへと注ぎ、テーブルの上にそつと置いてやつた。

「あ、い、いただきます」

「どうぞ」

カップに伸びる侍女の手は緊張で震え、こぼして火傷やけどをしやしないかと見て^見ている方が案じるほどだった。しかし、その手はきちんと教育を受けたと分かるしとやかな仕草で、カップを口元に持つていく。

次の瞬間、彼女の深い青色の瞳がぱちくりと瞬きまたたき、上品に弧を描いた唇が「とても美味しいです」と告げた。

そんな飾らない素直な様子に好感度が増すのを感じたクロヴィスは、自分の淹れた紅茶に口を付けつつ、ふと執務机の上に置き去りにされているもののこと思い出した。先ほど、スミレが庭で拾つて半分置いていった、大振りの木の実だ。

「……クリって、言つてましたね」

「はい。蒸しても焼いても美味しい木の実とのことで、スミレ様のご実家ではよくお召し上がりになられたと」

「……ふむ」

スミレが両手で掬つたそれは、大人の男の手ではひと掴みだ。

クロヴィスはそれを掌の上で転がしてまじまじと眺めていたが、突然懐から真っ白いハンカチを取り出したかと思うと、先ほどルリがスミレにしてやつたように袋状にし、その中にすべて放り込んだ。そして、それをルリの方にすいつと差し出す。

「ルリ、あなたにお願いがあります」

「あつ、はい。何でございましょう」

「この木の実で、お菓子を作つてご馳走してください」

「……えつ!?」

ルリは、突然の頼まれ事に戸惑つた。

ちゅうしつばつ 厨房勤めでもないルリが王城で料理を作るというのは、かなり気を使うことなのだ。

しかも、皇族の方々が口にするものを作るのに一介の侍女が出しゃばつては、厨房の者達だつて気分がよくなないだろう。

それでも己おのれが仕える母后陛下ほこうへいかに請われた時は場所を借りて作るのだが、宰相付きの侍

女めのわらわでもないルリが彼のためにお菓子を作るなど、本当に許されることなのだろうか。逡巡しゅんじゅんするルリの心を見透かしたように、クロヴィスは穏やかな笑みを浮かべたまま続けた。

「もちろん、無理にとは言いませんよ。あなたも本来の仕事があるのですから、都合がつかなければ手を煩わせるつもりなどありません」

「……」

「けれど、できればお願ひします。スミレに冒險心がないと言われたままで悔しいので、私もこれを食べてみたい」

「あの……」

「彼女に作ってくれと頼むのは癪しゃくなのですよ。私の気持ちを分かつていただけますか?」

「でしたら、ぜひ協力してください」

クロヴィスはそう言うと、ルリが持ったカップに手を添えてソーサーに戻させる。そしてその代わりに、びくりと震えた華奢な手に栗の入った包みを握らせた。

(ああ……)

ルリは心の中で小さく悲鳴を上げた。

受け取つてしまつた以上、もう断る術は残されていない。

思わず半泣きになつて声も出ない侍女に対し、麗しき宰相閣下はにつこりと笑うと、とても優しい声で告げた。

「その時は、また一緒にお茶を飲みましょうね」

「……」

「急ぎませんよ。でも、心待ちにしていますね——ルリ」

その後——

何とか宰相執務室から脱出したルリは、急いで母后陛下の私室へと逃げ帰つた。

戻つてきたルリの尋常ではない様子に気づき、彼女を妹のごとく可愛がる先輩侍女達は何ごとかと心配した。

混乱したままのルリが包み隠さず事情を話すと、彼女達はおおいに色めき立つた。

なんたつて、可愛い妹侍女が難攻不落と有名な宰相閣下の胃袋を掴んでしまつたのだ。
——これは、一大事！

侍女達が慌てて相談に上がつたのは、もちろん彼女達の主人のところ。

「まあまあ、何ですつて!?

話を聞いた母后陛下は、ぱああつと顔を輝かせた。

「クロヴィスが、ルリを? —— 素敵！」

麗しきグラディアトリアの国母は、いつまで経つても身を固めようとしない次男坊に、ついに春の兆しが訪れたと喜んだのだ。

しかもその相手となる女性は、彼女が我が子のように慈しんで成長を見守つてきた秘蔵つ子。

この縁を逃してなるものかと、母后陛下のやる気は俄然燃え上がつた。

その炎は、彼女に仕えるルリの姉侍女達にも燃え移り、ついには侍女頭をも巻き込んで、宰相閣下とルリの仲を取り持つ一大プロジェクトが発足したのだった。

2 瑠璃^{るり}と紅茶

トントンと、宰相執務室^{さいしょうしつむしつ}の扉が控え目にノックされた。

誰^{誰い}もせずに扉を開いたのは、この部屋の主である宰相クロヴィス。

「いらっしゃい。来てくださって嬉しいですよ、ルリ」

「お邪魔いたします、クロヴィス様……」

母后陛下^{ほこうへいか}に出来たのは、この部屋の主である宰相クロヴィス。

「いらつしやい。来てくださって嬉しいですよ、ルリ」

彼女^{かれ}がクロヴィスにお菓子を作る約束をさせられた日から、三日経っていた。

お菓子のメインは、三日前に庭で拾われた栗^{くり}。

グラデイアトリアでは一般的に人間の食用とはされていない木の実だが、レイスウェイク大公爵夫人スミによると、手を加えればとても美味しいのだという。

ルリは朝からそれを茹^くでて四苦八苦して皮を剥^むぎ、実についた渋い皮ごとシロップで甘く柔らかく煮て、クルミを使う時のように食感が残るほどの大ささに碎いた。

それを、煮詰めた時のシロップとともにケーキの生地に加え、型に流し入れて窯^{かま}で焼き上げて出来たのは、栗入りのパウンドケーキ。

大人の男性に振る舞うのだからと、甘さを抑える代わりにブランデーを少々加えたことで、香りのよい一品となつた。

もちろん、誰よりも先に味見をしたのは、ルリの主人である母后陛下だ。

母后陛下はそれを口にしたとたん、「あなたは天才よつ！」と叫んでルリを抱きしめた。彼女の命により、パウンドケーキは侍女頭^{じじょがしら}日々に切り分けられて箱に詰められ、本日の午後のお茶の時間、ルリとともに宰相執務室へと送り込まれた。

「クロヴィスには先触れをしてありますから、安心していつてらつしやい」

そう言って送り出してくれた母后陛下の言葉に背を押され、ルリは勇気を振り絞つて重厚な扉を叩いたのだつた。

「おや、指をどうしました？」

部屋の中に迎え入れられたルリは、ケーキの箱を受け取ったクロヴィスにそう問われルリの右の親指の先には、小さく包帯が巻かれていたのだ。

姉侍女に目立たないように薄く巻いてもらつたのだが、クロヴィスには目敏く見つけられてしまった。

「……そういえば、あのクリという木の実の皮は随分硬そうでしたね。もしかして、それを剥ぐ時に傷でも？」

クロヴィスの言う通り、栗の皮は茹でても硬く、ルリは最初力任せに剥こうと試みて、爪を少しばかり傷め、指先から出血してしまつたのだ。

それを察したらしいクロヴィスが表情を曇らせたので、ルリは慌てて右手を後ろに隠した。

「あなたに無理を言つて怪我をさせてしまったとは……面白い」

「そ、そんな……お気になさらないでください。私が不器用なのがいけないんです」そう言つて、おろおろと困つてゐるルリの姿を見て、クロヴィスは眼鏡の奥で目を細めた。

彼女の格好は、お馴染みグラディアトリア城の侍女のお仕着せ。

普段上に重ねている白いエプロンを外しただけの、シンプルでストイックな濃紺のワニピース。白いタイツと黒い靴も、侍女達に支給されたもの以外の何物でもない。ルリがもしもこの日、きらびやかに着飾つて現れていたならば、クロヴィスはおそらく

く興醒めしていたことだろう。

自ら呼びつけた手前、一応はお茶を振る舞つてもなすが、二度と彼女を執務室に呼ぶ気にはならない違ひない。

だから、このように飾り気のない姿で現れたルリをクロヴィスは一層好ましく思つた。「傷ついた指では、すべて剥ぐのに随分難儀をしたでしょう？」

「いいえ、私が剥いたのなんてほんの少しですし、侍女仲間が手伝つてくれましたのです……」

さらに、ルリには手柄を独り占めする気など微塵もないらしい。

こんな素直でいじらしい少女なら、周りの人間が助けてやりたくなるのも頷けると、それどころか下ごしらえを手伝つてもらつたと、周囲の人々の親切を嬉しそうに報告する。

クロヴィスは頬を緩めた。

そんな宰相閣下の思いがけない柔らかな笑みに、ルリの心臓はドキリと跳ね上がる。「では、ルリや侍女の皆さんのがんばつてくださつた逸品、さっそくいただきましょうか。いらっしゃい。お茶を淹れましよう」

ケーキの箱を掲げたクロヴィスはそう言うと、空いた方の腕をルリの背中に回し、彼

女をソファへと誘つた。

頬を赤く染めたルリがおとなしくソファに腰を下ろすと、クロヴィスはすでに運び込まれていたワゴンの上のポットに手をかける。

彼がお茶を淹れている間に、ルリもテーブルに置いた箱から栗のパウンドケーキを取り出した。

用意されていた皿とナイフを拝借し、均一に切り分けられた一切れをそつと持ち上げる。それをうまく皿の中央に載せられたところで、ほっと息をついた。

すると「あなたも一緒に食べるんですよ」とクロヴィスの笑いを含んだ声が降つてきて、慌ててもう一切れを取り分けた。

クロヴィスはカップに紅茶を注ぎ、畏まつて座るルリの前にそつと置いてやる。

「さあ、どうぞ」

「ありがとうございます。いただきます」

ルリは慌てて礼を言ふと、クロヴィスが自分用の紅茶も淹れ終えて向かいに座るのを見届けてから、そつとカップへと手を伸ばした。

利き手である右の指に包帯を巻いているので、少しばかり取手が持ちにくかつたが、ルリは慎重にカップを持ち上げる。

向かいで優雅にカップを傾けるクロヴィスに倣い、そつと熱い紅茶に口を付けた。すると口の中に芳しい香りと深みのある渋味が広がり、ルリは少しだけ緊張を解く。その時だった。

何かが、彼女の肩にそつと触れた。

「……？」

続いてするりと何かが腕を伝い、ルリは目を瞬いてそちらに顔を向ける。するとソファの背もたれを越えて、緑色をした薦が彼女の方へとしなだれかかってきているではないか。

しかも、薦はまるで動物のように蠢ぎ、細い蔓の先をしゆるりと伸ばしてルリの手首に巻き付いてきた。

「——きやつ……!?」

「ルリ!?」

驚いて声を上げた拍子に、指の包帯のせいで不安定になつていていたカップが傾いた。熱い紅茶がこぼれ、ルリの腕と膝にかかる。

彼女の手首に絡まつて一緒に紅茶を浴びた薦も、「熱つ！」とでも言うように身を引つ込めたかと思うと、パニックを起こしたかのように、葉をバサバサいわせて激しく蔓を

くねらせた。

クロヴィスが慌ててワゴンの上に載っていた布巾を引っ掴み、ルリに手渡す。ところが、彼女が真っ先に拭いたのは、熱々の紅茶が染み込んだスカートでも、いまだぼたぼたと雪を落とす己の腕でもなかつた。ルリはほとんど空になつたカップを素早くテーブルに置くと、いまだわたわたと蔓を振り回す鳶を捕まえる。

「あ、熱かったでしよう？　ごめんなさい……」

「ルリ？」

彼女が丁寧に拭っているのは、彼女を驚かせた鳶の葉だつた。

それには、クロヴィスも面食らう。

ルリは蠢く鳶植物を氣味悪がることも、紅茶を引つくり返す原因となつたそれに腹を立てる事もなく、むしろ気遣つているのだ。我が身もひどい有様だというのに。「クロヴィス様、葉にお茶がかかつてしましました。大丈夫でしょうか？」枯れてしまつたりしませんでしょうか？」

「……大丈夫ですよ。そいつはそんなにヤワではありません」

もしもそれが自分の優しさをアピールするための演技であつたなら、クロヴィスはさ

ぞかし苛立つたことだろう。

けれど先ほどのことは突發的なものだし、何よりルリの必死な顔を見れば、それが演技ではないことは容易に知れる。

クロヴィスはふわりと温かい想いが湧き起ころのを自覚しながら、やれやれと苦笑を浮かべる。

そうして立ち上がり近付くと、鳶を拭つていた布巾を取り上げ彼女の腕を拭いてやつた。

「その心配より自分の心配をなさい。ルリこそ熱かつたでしよう？　火傷やけどをしていませんか？」

「はい、私は大丈夫です。あつ、でも……せつかく淹れていたいた紅茶を……」

「紅茶くらい気にしなくともよろしい。またいくらでも淹れてさしあげます」

自分でしますと慌てるルリを無視して、クロヴィスは続いて彼女の服に布巾を押し当て水分を拭う。

しかし、すっかり広がつてしまつた染みは、今更拭つてもどうしようもなかつた。

「あ、あのつ……私、自室に戻つて着替えます。クロヴィス様はどうぞ」ゆっくりお茶

とケーキを召し上がるがつてください！」

「いただきますよ。あなたと一緒にね」

「あの、でも……午後のご休憩は長くはなさらないのでしょうか？」

一緒にお茶をいただけないのは残念だが、多忙な宰相閣下の貴重な休憩時間を無駄にしないためにも、ルリはこのままお暇する」と暗に伝える。

しかし、クロヴィスは首を縦には振らなかつた。

「一人ぼっちでお茶を飲むなどつまらないじゃないですか。私は、今日はルリと飲むと決めたんですよ。あなたは変な気遣いなどせずに、堂々とそこに座つていなさい」

彼はそう言うと、困った顔のルリを残して廊下に出た。

そして、通りかかった古参の侍女に事情を話し、ルリの主人である母后陛下への使いを頼んだ。

クロヴィスが部屋の中に戻ると、ルリは彼に言われた通りソファに座つたまま、背もたれにしなだれかかる葛を不思議そうに眺めていた。

「——セバス」

クロヴィスの厳しい声に、葛はびくりと竦み上がつた。次いで、こそそとルリの背中に隠れる。

ルリは瞳をぱちくりさせて、葛とクロヴィスを交互に見比べた。

「それは元々、スマレの故郷に生える『ポトス』という名の葛植物らしいんですが、兄の実験で突然変異を起こしましてね。レイスウェイク家の執事の話を聞いたことはありますか？」

「あ、はい……お噂なら、少し。なんでも、お屋敷の壁という壁を覆つて守つていらつしゃると……」

「そうです。これは、そのレイスウェイク家の執事セバスチャンの新芽から育つた分身。スマレは“ちびセバス”と呼んでいましたね」

「まあ……」

レイスウェイク大公爵家の執事は、自ら蠢き、文字を読み書きして人間と完璧にコミュニケーションがとれる魔訶不可思議な葛植物。

そんな葛執事セバスチャンから独立して、手提げの籠に入るくらいの鉢に植えられて宰相執務室に連れてこられたのがちびセバスだ。それから随分と育ち、鉢も二度新調してもらった。

現在はクロヴィスの執務机の周りをくるりと囲めるくらいに大きくなつてゐる。

うになってきた。

しかしながら、彼——ちびセバスは、ちょっとばかり人見知りをするタイプ。三日前、初めてルリがこの部屋を訪れた際は、ただの観葉植物のふりをしていて、彼女に接触しようとはしなかった。

しかし、二度目に訪れたルリに興味を引かれたのか、それとも彼女の優しげな雰囲気に誘われたのか、そつと近寄ってきたのだ。

驚かせるつもりはなかったが、結果としてルリに迷惑をかけてしまったことを悔やんでいる様子。叱られるのを覚悟してか、蔓も葉も心なしかしゅんとしてしまった。

クロヴィスはそんな彼を軽く睨むと、ルリに向き直って言つた。

「初めて見たルリが驚くのは当然でしょう。すべてセバスの不注意です。怒つてもいいのですよ」

「怒るだなんて、そんな……。挨拶に来てくださつたんですよね？ それなのに、私つたら大げさに驚いてしまつて……」

ルリのそんなお人好しな発言に、クロヴィスはやれやれとため息をついた。

「……まつたく。あなたつて人は、つくづく……」

これが部下なら甘いと一喝するところだが、ルリならばなんだか可愛らしく思えてし

まう。

クロヴィスは苦笑を浮かべると、「それにしても……」と続けた。

「初めて^{うこめ}森く薦を見たうちの文官や侍女達は、誰しもまずは気味悪がつたものです

が……ルリは平氣なのですね？」

顎に片手を当てて感心したように告げるクロヴィスに、ルリは恥ずかしそうに頬を染めて答えた。

「あの……紅茶を引つくり返してしまつたことに気を取られて、それどころではなくつて……。ふ、不思議な薦なのですね……」

そうこうしている内に、彼女の着替えが届いた。

クリーム色の生地に纖細なレースがあしらわれた上品なワンピースだ。

クロヴィスはそれをルリに手渡し、廊下に出た。

それでも、着替えが届くのがいやに早い。

不思議に思つて使いの侍女に尋ねると、ワンピースは元々母后陛下^{はこうへいか}がクロヴィスを訪ねるルリに着せようと用意していたものだと。しかしルリは、母后陛下の厚意に深く感謝しながらも、自分の立場は弁えないと侍女のお仕着せを決して脱がなかつたのだと

クロヴィスとルリをくつつけたいという母后陛下の思惑とは裏腹に、ルリは自分が宰相閣下の特別な存在になろうなどとは考えもしないらしい。

「クロヴィス様、お待たせして申し訳ありません」

しばらくして、執務室の扉が開いて彼女が顔を出し、深々と頭を下げた。

母后陛下の用意したワンピースは、ルリを愛らしい侍女から可憐な淑女へと変えていた。

クロヴィスはその姿を目を細めて見下ろすと、いまだソファの背もたれにへばりついているちびセバスに向かって言った。

「セバス、彼女はルリです。これからもこの部屋に招くことがあると思いますので、よく覚えておきなさい」

「え?」

「さあさあ、早くケーキをいただきましょう」

「あの、クロヴィス様?」

「ああ、紅茶も淹れ直しましょうね」

「あの……?」

クロヴィスの言葉に、ちびセバスは承知とばかりに葉をざわつかせた。

それに満足げに頷くと、クロヴィスは戸惑っているルリをソファへと座らせる。

そうして紅茶を淹れ直し、ようやく口に入った栗のパウンドケーキを絶賛した。

ルリが母后陛下のもとに戻った後、残ったケーキは宰相執務室に立ち寄った皇帝陛下とその護衛騎士、続いて書類を持ってきた甘い物に目がない副官に振る舞われた。彼らはいつになく上機嫌な宰相閣下に、顔を見合わせて首を傾げた。

この日以来、母后陛下付きの一番若い侍女が、お菓子を持って宰相執務室に出入りますが頻繁に見られるようになった。

「ねえ、ルリ。ちょっとこちらにいらっしゃい」

「はい、母后様」

ある日の午前中、母后エリザベスは馴染みの仕立て屋を私室に迎え、大量の生地を吟味しながらルリを側に呼び寄せた。

母后陛下は侍女のお仕着せに身を包んだ少女を目の前に立たせ、首の下に布を当てては顔映りを確かめつつ言つた。

「ルリは青がよく似合うわね。そのお仕着せのような濃紺もいいけど、どちらかというと薄い色の方が映えるかしら」

ルリは、母后陛下は双子の皇女や義理の娘となつたスマレのドレスを新調するつもりなのだとthoughtっていたが、彼女の指示で仕立て屋が自分の身体のサイズを測り始めたので戸惑つた。

「あの……？」

「クロヴィスの方は、逆に少し濃い青がいいかしらねえ」

さらに、何故か同時進行で宰相閣下の上着の仕立ての話になつたので、また首を傾げる。ルリ用に選ばれた涼やかなライトブルーの布地に合わせ、クロヴィス用には少し赤味の入つた青い布地が選ばれた。その色は、まさにルリの瞳の色そのものだった。

ところが、それらの生地を受け取つた仕立て屋は、少し困つた顔をした。

「宰相閣下の御仕立ては初めてでございます。採寸にお時間を割いていただけますでしょうか」

それを聞いた母后陛下は、何か楽しいことを思ついたようにぱつと顔を輝かせると、そのままルリに向き直つて言つた。

「そうだわ、ルリ。あなたにクロヴィスの採寸を任せますわ！」

「えっ!?」

ルリはぎょっとしたが、主人の言葉に否を唱えられるはずもない。

とにもかくにも採寸紐を手渡され、にこにこした母后陛下と姉侍女達に追い立てられるようにして、ルリは廊下へと出された。

いつものお茶の時間のようにクロヴィスに招かれているわけではないので、どうしても足が竦んでしまう。

けれど、いつまでも廊下でおろおろしているわけにはいかない。震える足を叱咤して宰相執務室に向かつて歩き始めた。

母后陛下のおわす棟と皇帝陛下や宰相閣下の執務室は、大きな回廊で繋がつてゐる。

ルリはその回廊の途中で、最近顔なじみになつた宰相の副官にばつたり会つた。

ルリのお菓子のおこぼれにあずかることが多い副官は、彼女から事情を聞くと、これからちょうど宰相閣下に書類を届けるのご一緒ましょうと誘つてくれた。

そうして連れ立つて宰相執務室の大きな扉の前までやつてくると、緊張をあらわにしたルリに苦笑した副官が、それをノックした。

「——入りなさい」

返ってきたのは、どこか厳しい、凛とした声。

部屋の奥に位置する執務机についているクロヴィスは、ちらりと扉の方に視線をよこしたが、どうやら大柄な副官の身体に遮られて、ルリの存在には気づいていない模様。彼はすぐに視線を戻し、自分の机の前にいたたまれない様子で立っている男を見上げた。

その瞳の鋭さに、宰相閣下は部下を叱っている最中であると悟った副官とルリは、口を噤んで顔を見合わせた。

「できませんでした、では済まないのですよ。できないことなら、最初から請け負わなければよろしいのでは？　ご自分の力量さえ測れないのですか？」

「も、申し訳ありません……」

「謝っていただかなくて結構です。無意味な謝罪を聞いているほど、私は暇ではありません」

ぴしやりと厳しく返されて、クロヴィスよりもずっと年嵩に見える文官は顔を青く泣く子も黙る鬼宰相であるとの噂は知っていたが、ルリは穏やかにお茶を飲むクロヴィスしか見たことがなかった。そんな彼女が、初めて見る宰相としての彼の姿。

自分が叱られているわけでもないのに、身が竦んでしまう。

それは、長年彼の下についている副官も同じだつたようだ。

仲良く扉に貼りついたルリと副官が見守る中、クロヴィスは目の前の文官が提出したらしい未完成の書類を突き返し、厳しい表情のまま告げた。

「あなたの怠慢ゆえのことならば首を切るところです。しかし、やむを得ぬ事情があったのならば、他の者に助力を求めるしかないでしょう。皆に頭を下げなさい。——夜まで、待つてさしあげます」

「は、はいっ……」

どうやら、仕事が間に合わなかつたのは文官の怠慢が理由ではなく、何か事情があつてのことのようだ。

クロヴィスは彼の努力と事情をちゃんと理解した上で、猶予を与えた。

そんな宰相閣下の姿からは、噂のような冷徹さだけではなく、同時に部下を思いやる優しさも感じられた。

文官もそれをはつきりと感じ取つたのだろう、慌てて彼に頭を下げて書類を受け取ると、副官への挨拶もそこに宰相執務室を飛び出していった。

「——やれやれ。無意味なプライドなどさつさと捨てればよかつたんですよ。まったく、世話の焼けるおっさんですね……」

バタンと扉が閉じたとたん、クロヴィスは執務机に肘をついて深々とため息をつき、そっぽやいた。古い付き合いである副官の前では、彼の態度もいくらか碎けるらしい。どうやら、ルリの存在にはまだ気づいていない様子のクロヴィスに、副官は笑いを堪えながら声をかけた。

「閣下、いらっしゃりますよ」

「うん？ 何ですか？」

どこか気怠げに扉の方に顔を向けたクロヴィスは、そこに大柄な副官と並んで立つルリを見つけ、眼鏡の奥の目を大きく瞬いた。

「——ルリ!?」

「と、突然お邪魔して申し訳ありません……」

副官は恐縮するルリを促してクロヴィスの執務机まで進み、自分の書類を手渡すと、彼女を残してさつさと部屋を出てしまった。

その代わり、緑の鳶がするすると伸びてきて、ルリに挨拶する。

宰相の新米補佐官ちびセバスの歓迎に、ルリが少しだけ緊張を緩めると、クロヴィスはやれやれと苦笑した。

「嫌な場面を見せてしましたね。いい大人に対しての説教など、見苦しかったでしょ

う？」

その言葉に、ルリは慌てて首を横に振った。

「私も、ミスをすると侍女頭に叱られます」

「ん？ ……ああ、あの侍女頭は厳しいと有名ですからねえ」

「でも、叱っていただけるということは、私にはまだ可能性があると信じていただけているんだと思って、次は絶対もつとがんばろうと思うんです」

「そうですね、どうあがいても使えない者を叱咤するなど、時間がもつたいないですものね」

「えっと、あの…………ですから……」

ルリはもごもごと口籠る。うまく言葉が続かないが、彼女の言いたいことをちゃんと理解したらしいクロヴィスは、柔らかく笑んで頷いた。

「氣を使わせてしまってすみませんね。あなたには『鬼の宰相』は見せたくなかつたんですが……」

「鬼だなんて、そんなつ……！」

「怖くはありませんでしたか？」